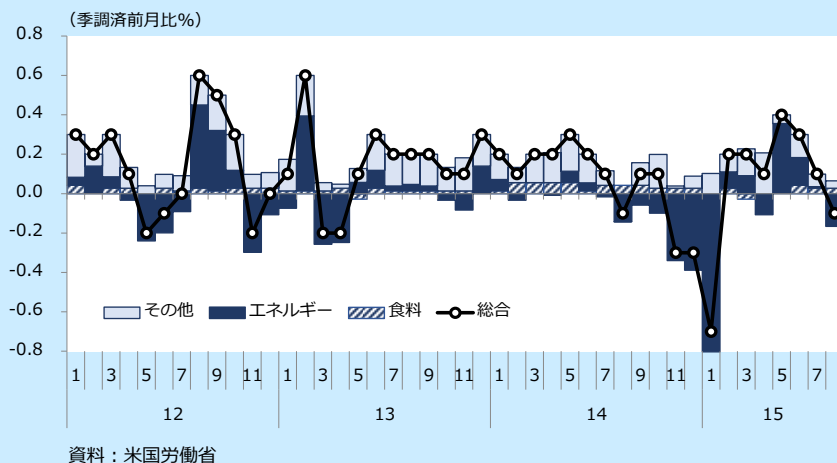


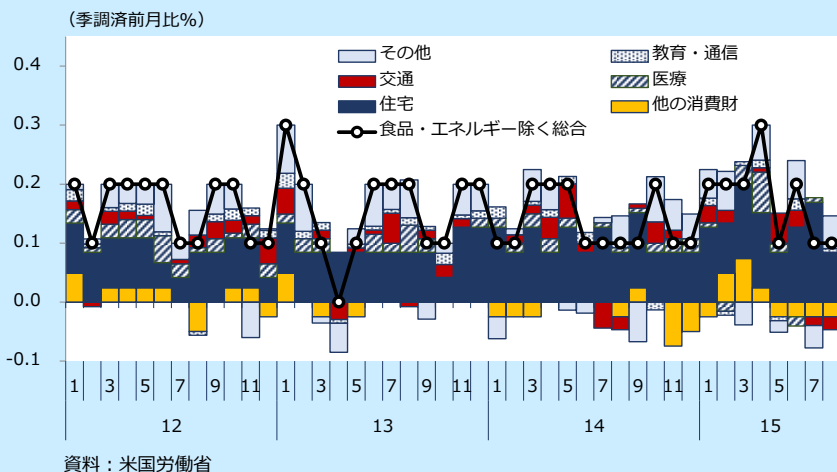
# 米国：消費者物価（2015年8月）

## MRI Daily Economic Points September 17, 2015

図表1 消費者物価指数(総合)



図表2 消費者物価指数(食品・エネルギー除く総合)



### 評価ポイント

#### 今回の結果

- 15年8月の消費者物価指数(米労働省、9/16公表)は、季調済前月比 ▲0.1%と7ヶ月ぶりに下落に転じた。前年比では+0.2%となり、前月(同+0.2%)から変化なし。
- 原油価格の下落により、エネルギー価格が季調済前月比 ▲2.0%と4ヶ月ぶりに下落に転じており、物価全体を押し下げた。食品は同+0.2%と3ヶ月連続の上昇となった。鳥インフルエンザの影響から卵が同+7.7%上昇した影響が波及している。
- 変動の大きい食品・エネルギーを除いたコアベースでは、同+0.1%と引き続き上昇基調を維持している。コアベースの前年比は+1.8%と前月(同+1.8%)から変化なし。
- 食品・エネルギー除く総合(コア)の内訳をみると、4割程度のウェイトを占める住宅が季調済前月比+0.2%と上昇を続けている。一方、ドル高による輸入コストの低下などを受けて、自動車や雑貨など消費財の価格が同 ▲0.1%と4ヶ月連続で低下した。

#### 基調判断と今後の流れ

- 原油価格の下落やドル高が物価の下落圧力となっているものの、住宅やサービス価格を中心に物価の上昇基調は変わらず、食品・エネルギーを除くコアベースでは、年率で1%台後半の伸びを維持している。
- 先行きも、雇用・所得環境の改善を背景に内需が堅調に推移すると予想されることから、物価もコアベースで1%台後半の伸びを続けるとみる。
- 今回の結果がFOMCの利上げ判断にどのように影響するか。失業率は約7年ぶりの低水準であり、FOMCの長期失業率(5.0-5.2%)水準まで低下している。一方、物価上昇率は依然として目標とする2%を下回っているものの、原油安やドル高による下押し圧力がコア指数にも少なからず及んでいることを勘案すると、実質的に利上げの妨げとなる水準とはいえないだろう。